

平成二十八年 度 第一回 入学試験問題

国 語

(五〇分、一〇〇点)

受験についての注意

- 一、試験開始のベルが鳴るまで、問題用紙を開かない  
てください。
- 二、問題は  ～  まであります。
- 三、各問題とも、解答は解答用紙(別紙)の所定の欄  
に記入してください。
- 四、解答用紙には受験番号、名前を必ず記入し、最後  
にもう一度確認してください。
- 五、解答用紙だけ回収しますから、問題用紙は持ち帰  
ってください。
- 六、指示がない限り、句読点や記号などは一字として  
数えます。
- 七、正しく読めるように、読みがなをふったところが  
あります。

— 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。二つの

□に入った説明は、ここまでと途中のあらすじです。

ぼくは学校の創立記念行事の委員であった。それほどやる気のあつたわけではなかったのだが、キャンドルナイトをしたらどうかという自分の提案が通り、実行委員会の副委員長になってしまった。

実行委員会の始まる前、教室の隅で進藤先輩しんどうせんぱいを呼びとめる。水原の持ってきた資料は、結局、ぼくの手から先輩に渡すことになった。<sup>①</sup>  
「へえっ、なるほどね」

ファイルのページをめくるたび進藤先輩が感心したような声を出す。

「ぼくは道具や材料のほうばかり調べていたんだけど、こういうのがあると全体のイメージがつかみやすいなあ。ありがとう、ほんと助かるよ。さすがだ、副委員長」

先輩はそう言つて無邪気むじやきに笑つてみせる。

「……いいえどういたしまして、委員長」

やけくそぎみにそう返す。ちらりと水原を見ると、水原はほつとしたような顔をしていた。<sup>②</sup>

ばらばらと他のメンバーも集まりはじめ、今学期最後の話し合いが始まった。

「創立二十周年記念行事委員会」は、各クラス四名ずつの委員で成り立っている。A組からD組まで、各学年四クラスずつあるので、計四十八名の大所帯だ。そのうち学年を縦割りにして、A、B組が記念式典担当、C、D組がキャンドルナイト担当と分けられることになった。わかりやすくするため、それぞれ「式典委員」と「キャンドル委員」と内輪で呼ばれているが、ぼくがどちらに属しているかは言うまでもない。

「当日に使うキャンドルの種類とか、あとキャンドルホルダー、ええと、つまり外側のほやにあたる部分だよ、これをどういうもので

やるかっていうのをいろいろ考えてみて……」

進藤先輩が前に立ってみんなに説明する。元気は眠そうな目で頬杖をつき、水原は隣で熱心にメモを取っている。

「それで、いろいろ調べた結果、これがいちばんいいんじゃないかと思うんだけど……」

そう言って先輩が机の上に出して見せたのは、白い紙コップだった。バーベキューなんかで使うような、ごくふつうのやつだ。その横に、平たいアルミカップに入ったキャンドルを並べて置く。ちょうどラップの芯を輪切りにしたくらいの大きさで、薄い円筒形をしている。こつちもそっけないくらいシンプルならうそくだった。

「このカップに、このタイプのろうそく、ええと『ティーライトキャンドル』っていうそうなんだけど、これをひとつずつ入れて校庭に並べていく。値段も手ごろだし、ぼくたちにも扱いやすいし、いちばん妥当だと思うけど、どうだろう」

話は次のように続く。委員から他の材料を使ったカップやロウソク案がでたが、委員長の調べてきた内容を聞くと、委員長案案でいくことに決まった。次にキャンドルナイトのテーマを決めることとなった。次々と意見が出る中で、木崎先輩が「キズナ」というテーマを提案すると、周囲からは賛成の声があがった。

「そうだな。文字でやるとしたら、やっぱりこれかな」

「いいんじゃない？ 最近よく見るし」

「だよね」

みんなの意見もほぼ一致したようだ。木崎先輩はにっこりと満足げに腰を下ろす。そのとき、カラカラと戸を開けてそつと谷先生がすべりこんできた。進藤先輩に向かって小さくうなずきかける。

「ええと、それじゃあ今、『絆』という意見が出たんだけど、みんなどうかな。いちおう、ぜんぶの意見が出そろってから、多数決を取ったほうがいいと思うんだけど」

進藤先輩が言うと、

「いいよ、もう、それで」

「さんせーい」

「早く決めてさつさと帰ろうぜ」

あちこちで声があがる。先輩はちらりと谷先生に目をやった。

「え、じゃあ、もういいのかな。どうだろう、もしなにか、他の案とか、意見のある人がいれば、今のうちに……」

そのとき、すいと手があがった。

いつせいに視線が集まる。手をあげたのは、水原白だった。

それまでゆるんでいた教室内の空気がきゅつと

(……なんだよ、めんどくさいな)

(せつかく決まりそうなのに)

④ 誰も声に出したわけではないのに、そんなささやきが聞こえた気がした。

水原は目を伏せて、それでもあげた手を下ろそうとはしなかった。

「えーと、二ーCの、水原さん？ いいよ、意見があるならどうぞ」

進藤先輩に促され、水原はそろそろと立ちあがった。顔を上げ、思い切ったように話し始める。

「……あの、あたしは、もうちょっと、ちゃんと考えたほうがいいと思うんです」

「なんで？ あたしのはちゃんと考えてないってこと？」

木崎先輩がきれいなポニーテールを揺すりながらおどけたような声を出した。水原は慌てて打ち消すように首を振る。

「あ、ちがうんです。あの案がよくないとかそういうんじゃないなくて、……そうじゃなくて」

水原は顔を赤くして、それでも必死に言葉を探したそうとしているように見えた。谷先生は黙って腕組みをして聞いている。

「テーマはそれでもいいと思うんです。でも、あの……それって、大事なことだから。大事だから、そんな簡単に表しちゃいけないと思  
うんです。その、もつと他にやり方があるというか……うまく言えないけど」

目の端に、水原がぎゅつとスカートを握りしめているのが見えた。

「あたしは、なんか、嫌です」

再び顔を上げ、きっぱりとそう言った。

「せっかくやるキャンドルナイトで、簡単にそういう文字を使うの。……なんかそれって、お弁当にせったい入ってるプチトマトみたい。  
みんな入れているからそれを入れてれば安心、ていうか、なにか、そんな感じがして」

どこかでくすりと笑う声があった。水原はそれに気づかず、さらにしゃべり続ける。

「でも、ほんとはみんな、そんなの好きかどうか、そういうのちゃんと考えたことって——」

「なにそれ。意味わかんない」

誰かが小さくつぶやき、あちこちからつられたようにくすくすと笑い声此起彼伏。水原はハツとした顔でようやく口をつぐんだ。教室  
がざわつきはじめる中、うつむいたままそつと腰を下ろす。ふと目に入る。床に置いた水原のバッグの中から、何冊ものファイルがのぞ  
いていた。

進藤先輩が困ったような顔で頭をかき、助けを求めるように書記役を見る。

「ええと、それじゃあ……」

⑤ 気がつけば、手をあげていた。元気がぎよつとした顔でほくを見る。

「あの、レイアウトはまだ先でも間に合いませんか？ ……その、無理して今決めなくても使う材料は決まったし、とりあえず予算内で  
大まかな個数さえ出せば、あとはそれに合わせればいいし」

⑥ ほくがそう言うと、進藤先輩もようやくこりしてうなずいた。

「うん、そうだな。レイアウトに関しては、もう少し練ってみてもいいかもしれない。各自、夏休み中に考えてくるっていうことでどう

かな。せっかくなら、納得のいくものにしたらいし。先生、どうでしょう、次回でも大丈夫ですか？」

谷先生は黙つてうなずいた。ほくもほつとして息を吐く。我ながら、自分の行動に驚いていた。

会が終わって、ほくが進藤先輩と話しているうちに、水原は荷物を抱えて早足で教室を出ていった。女子が何人かたまって、その後  
ろ姿に向かつてなにかひそひそとささやき交わしているのが見えた。

（市川朔久子『紙コップのオリオン』）

※1 ほや……ランプなどの火を覆うガラス製の筒。

問一 ——線①「水原の持ってきた資料」の説明として正しいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア あちこちで行われたイベントから調べた、キャンドルナイトの全体像を示した資料。

イ 過去のイベントで使われていた、キャンドルとキャンドルホルダーの資料。

ウ 今までのイベントから実行委員会全体の仕事を細かく調べ、役わりを分けてある資料。

エ 様々なイベントを参考に全体のイメージを実際に作り、写真で見られるようにした資料。

問二 ——線②「水原はほつとしたような顔をしていた」理由として適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 先輩が自分ではなく、副委員長をほめたことがうれしい。

イ 先輩のいやみに対して、副委員長がかばってくれたので喜んでいる。

ウ 自分のしたことがいきすぎでなく、役に立ったと安心してている。

エ 自分の意見を副委員長が代わりに言ってくれたので、感謝している。

問三 ③ に入る適切な語を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 硬くなった      イ 読めなくなった      ウ 小さくなった      エ しめあげられた      オ 息苦しくなった

問四 線④「水原は目を伏せて、それでもあげた手を下ろそうとはしなかった」のはなぜですか。説明しなさい。

問五 線a～dのうち、種類の異なるものを一つ選び、記号で答えなさい。

問六 線⑤「気がつけば、手をあげていた」とあるが、そのきっかけとなる水原の様子が本文中に三つ書かれている。五行前の

「誰かが小さくつぶやき」から始まる段落以外に二つの文をさがし、それぞれ初めの五字を答えなさい。

問七 線⑥「それ」の指すものを書きぬきなさい。

## 二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

視覚障害者用の誘導ブロックと同様、最近では、駅や公共性の高い建物へのエレベーターの設置がすすんできました。むしろ、バリ  
アフリーといえば、こちらをまず思い浮かべる人のほうが多いかもしれません。

エレベーターの必要性は、たいていの場合、つぎのような論理で語られます。

人はふつう、階段の昇り降りに不自由のないからだをもっている。ただし、なかにはそれができない人たちがいる。手術をしたり、訓練をしたりすることで、その人が自分の足で階段を昇り降りできるようになればそれに越したことはない。①、残念ながら現在の医療技術では、すべての人の足を治すことはできない。だからといって、ほったらかしにしておくのはまずいだろう。だったら、エレベーターをつけることで対応しよう。

この考え方はわかりやすいですね。視覚障害者がホームから転落することを防止するための手段についても、おなじような発想から語られるのが一般的かと思えます。本当は、目を見えるようにするのが一番なんですけど、それが無理だから、かわりに誘導ブロックとかホームドアを設置するんだと。

要するに、足が動けばいい、目が見えるようになればそれがベストの解決策だということですね。足が不自由だからこそ、目に障害があるからこそ問題が生じるのだ、言い換えるなら、ふつうでないからだにこそ原因があるんだ、ということですよ。

一見、理にかなった見方のようだし、実際、多くの人はそんなふうに考えていると思うんですけど、これって本当なのでしょうか。ほんとには、どうもちがうように思えるんですよ。

たびたびですが、またまた想像してみてください。もし、すべての住人が、背中にペガサスのような翼をもっている社会があったとしたらどうでしょう。

たぶん、この社会には階段なんてものはないと思うんですよ。だって、みんな羽をもっているわけだから、バタバタとひと飛びすれば、好きな階に行くことができる。えっちらおっちらと一段ずつ歩を運んだりという面倒なことをする必然性がありません。窓を大きく

開いておくなり、床から天井に抜けて翼を広げた人間が通れるだけの穴を空けておけばいいだけです。

③ だけど、もしこの社会にあなたが投げ込まれたらどうなるでしょう。あなたの背中には羽はありませんよね？ ぼくにはありません。あつたらこわい……。

翼をもたないあなたが、この社会にくらすのはきつと大変でしょうね。なにせ、上下の階への移動手段がないんですから。鳥人間たちに手伝わってもらわない限り、あなたは目的の階へ移動することができません。 2、いま現在の社会では「健常者」であつたとしても、鳥人間たちの社会に引越したとたん、あなたは「障害者」となるわけです。

このように、なにか「ふつう」であり、誰が「健常者」であるかは、実は絶対的なものではなく、相対的に決まるものなんです。ほかたちのくらす社会では、階段はあることが「ふつう」であり、階段を昇り降りできるからだこそが「ふつう」のからだということになっているけれど、鳥人間たちの社会では、階段はないことが「ふつう」であり、階段などなくても上下階への移動に支障のないからだこそが「ふつう」のからだであるとされるわけです。

これを、車いすの人と自分の足で階段の昇り降りができる人との関係に置き換えてみるとどうなるでしょう。

車いすの人が上下階への移動に困難をおぼえるのは、現在の社会では、自分の足で階段を昇り降りできることが「ふつう」であると前提され、そのために、階段があることは「ふつう」であつても、エレベーターやスロープは、特に設置されていなくても「ふつう」と考えられているためです。

だけど、もし今後、バリアフリーの考え方がもつとつと社会に浸透して、階段だけでなく、すべての建造物にはエレベーターやスロープがあるのが「ふつう」という状況になったとしたら、事態はずいぶんと変わりますよね。上下階への移動に関する限り、車いすに乗っているということはなんら問題ではなくなる。

階上や階下への移動に階段も利用するか、エレベーターやスロープだけを利用するかのちがいがあただけで、健常者と車いす利用者の関係は、一方が「ふつう」でもう一方は「ふつうでない」といったような非対称なものではなくなるはずですよ。

もしかすると、実際には逆で、どちらかが「ふつう」でどちらかが「ふつうでない」といった見方がなくなつたとき、はじめて 3 が社会のあらゆる領域に浸透するのかもしれない。まあ、このへんは、鶏が先か卵が先かといった議論とおなじく、どちらが先ということではなく、相互に影響し合いながら、すすんでいくものなんだろうと思います。

ともあれ、障害者の経験する困難の原因は、通常考えられているように、手足が動かなかったり、目が見えなかったりすることからもたらされるわけではないということ、いま信じられている「ふつう」は必ずしも絶対的なものではなく、それとはまったく異なつた「ふつう」があり得るということ、そのもとでは、いま「障害者」とされている人間が障害者でなくなつたり、逆に「健常者」とされている人間が「障害者」になつてしまうという可能性もあるんだということを、ここでは押さえておいてください。

(倉本智明『だれか、ふつうを教えてください!』)

問一 ——線①「つぎのような論理」が書かれているのはどこまでか。終わりの五字を答えなさい。

問二 1 2 に入る語として適切なものをそれぞれ次の中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア やはり      イ つまり      ウ さて      エ けれど      オ たとえば

問三 ——線②「想像してみてください」とあるが、想像させることで筆者は何を読者に分からせようとしているか。

次の文の [ ] に当てはまる言葉を、指定された字数で本文中から書きぬいて答えなさい。

何が [ 1・三字 ] で何が [ 1 ] でないかは、 [ 2・十字以内 ] だということ。

問四 ー線③「もしこの社会にあなたが投げ込まれたらどうなるでしょう」について、

- 1 「この社会」とはどのような社会か。本文中から探して初めと終わりの五字を答えなさい。
- 2 「どうなるでしょう」とあるが、どうなるのか。四十字程度で答えなさい。

問五 ー線④「上下階への移動に関する限り、車いすに乗っているということはなんら問題ではなくなる」ことによって、ある変化が起こると筆者は考えている。なにがどうなるのか。本文中から探して初めと終わりの五字を答えなさい。

問六 3 に入る語を本文中から書きぬきなさい。

問七 筆者が考えていることとして正しいものには○、正しくないものには×で、それぞれ答えなさい。ただし、すべて○、またはすべて×という解答は認めません。

- ア 障害者が日常生活において経験する困難は、体の不自由さからもたらされるわけではないということ。
- イ 階段を昇り降りできるからだが「ふつう」で、「ふつうでない」からだだから困難を感じるということ。
- ウ 現在自分が生活している社会での「ふつう」は、いつでもどこでも通用するわけではないということ。
- エ いま障害者とされている人も健常者とされている人も、条件によっては立場が変わり得るということ。
- オ 「ふつう」か「ふつうでない」かという考え方は鶏が先か卵が先かといった議論と同じだということ。

三 次の詩を読んで、後の問いに答えなさい。ただし、一部仮名づかいを変えている部分があります。なお、上の数字は行番号を示しています。

雁<sup>\*1</sup> 千家元麿

- 1 暖い静かな夕方の空を
- 2 百羽ばかりの雁が
- 3 一列になって飛んで行く
- 4 天も地も動かない静かな景色の中を、不思議に黙って
- 5 同じように一つ一つセッセと羽を動かして
- 6 黒い列をつくって
- 7 静かに音も立てずに横切ってゆく
- 8 側へ行ったら翅の音が騒がしいのだろう
- 9 息切れがして疲れているのもあるのだろう
- 10 だが地上にはそれは聞えない
- 11 彼等は皆んなが黙って、心でいたわり合い助け合って飛んでゆく。
- 12 前のものが後になり、後ろの者が前になり
- 13 がを助けて、セッセセッセと
- 14 勇ましく飛んで行く。

- 15 その中には親子もあろう、兄弟姉妹も友人もあるにちがいない  
16 この空気も柔いで静かな風のない夕方の空を選んで、  
17 一団になって飛んで行く  
18 暖い一団の心よ。  
19 天も地も動かない静かさの中を汝ばかりが動いてゆく  
20 黙ってすてきな早さで  
21 見ている内に通り過ぎてしまふ。

※1 雁……「ガン」もしくは「かり」と読む。カモの仲間。大形で首の長い鳥。列を作って飛ぶ。秋に北方から日本に渡ってきて、春に北方へ帰る。

2 汝……お前

問一 1～7行からわかる作者の気持ちとして適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 一切動くことのない天と地の間を列を作って飛ぶ雁の姿に不自然さを感じている。  
イ いっせいに同じ動作をくり返しながら飛んで行く雁の姿に親しみを感じている。  
ウ 動くものがない風景の中、物音を立てず飛ぶ雁の姿に神秘的な雰囲気さえ感じている。  
エ 夕暮れの光を浴びながら、静かに音も立てず飛んで行く雁の列に不吉さを感じている。

問二 8・9行の説明として適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 雁は実際には静かなものではないことを確かめるために、そつと近寄っている。  
イ 心が吸い寄せられるように雁の群れから一羽一羽の雁に視点が動いている。  
ウ 雁の中には群れから脱落するものもいるのが自然だということを実感している。  
エ 不思議な動きをする雁の中に人間的なものがあるのではないかと想像している。

問三 □に共通して入る一字の語を1～14行から書きぬきなさい。ただし「雁」以外のものとする。

問四 16・17行で作者が伝えようとしていることとして適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 雁たちが家族や仲間を思いやりながら飛んでいること。  
イ 雁たちが秋の夕方の空をどうと飛んでいること。  
ウ 雁たちが冬の訪れから逃れるように飛んで行くこと。  
エ 雁たちが夕日の中静かに群れを作って飛んで行くこと。

問五 雁の群れのことを比喩的に表現した部分を書きぬきなさい。

問六 この詩の表現の特徴として適切でないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 夕方の空を飛んで行く雁の群れの姿を静と動の対比を用いて印象的に表現している。
- イ 「セッセ」という擬態語を用いることで、雁が一生懸命飛んでいる姿を表している。
- ウ 11・12行や19・20行のように倒置法を用いることで印象を強めている。
- エ 「いたわり合い助け合い」のように擬人法を用いて雁の様子を描いている。

四

次の熟語の□には、それぞれ同じ漢字が入ります。その漢字を書きなさい。

- |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|
| 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 岡 | □ | □ | 右 | 以 |
| □ | 立 | 業 | □ | □ |
| 八 | □ | □ | 左 | 伝 |
| □ | 歩 | 得 | □ | □ |

五

線部の平仮名を漢字に直しなさい。

- 1 お互いのきよりがちぢまる
- 2 大画面のえいぞう
- 3 実験結果のけんしょう
- 4 がくめんどおりに受け取る
- 5 かんげきのあまり涙が出た

国語解答用紙

一

問一

問二

問三

受験番号

氏名

注意 ※の箇所には記入しないでください。

※

問四

※

問五

問六

問七

二

問一

問二

1

2

問三

1

2

1

2

1

2

※

問四

1

1

2

1

2

1

※

2

問五

イ

ウ

エ

オ

問六

問七

ア

イ

ウ

エ

オ

※

三

問一

問二

問三

問四

問五

問六

四

1

2

3

4

5

※

五

1

2

3

4

5

※

まる